

日本がん疫学研究会

平山 雄先生に対するお別れの辞

富永祐民（愛知県がんセンター研究所）

平山先生、先生とこんなに早くお別れしなければならなくなるとは夢にも思いませんでした。先生ご自身も仕事半ばで倒れられ、さぞかし残念な思いをされたことでしょう。先生は去る9月に倒られる直前まで、講演に、執筆に、研究に、若い者でも真似ができていくらい活躍されていました。先生は入院されてからもベッドの上で最後の最後まで仕事のことを口にされました。私が枕元で最後にお聞きしたのは「どのようながんでも発がん因子の影響を受け易い“窓が開いた年齢”がある。たばこの場合は15-6歳の未成年者であり、乳がんは胎児期である。これからは他のがんについてもそれぞれに発がん因子の影響を受けやすい“窓が開いた年齢”を考える必要がある。」ということでした。

先生は最近数年間は活性酸素とがんや老化の関係に注目され、緑黄色野菜やベータカロチンを多量に摂取する必要性があることを力説されました。また、先生は今年になってからは未成年期に喫煙を開始した者の肺がんリスクが高いのは、未成年期の喫煙が危険なのか、喫煙開始が早いために喫煙継続期間が長くなり、肺がんリスクが高くなるのかのむずかしい問題に取り組まれ、喫煙継続期間をそろえても未成年期、特に15-6歳に喫煙を開始した者20歳以降に喫煙を開始した者に比べて肺がんリスクが高くなることをきれいに証明され、その結果を日本癌学会で発表されました（愛知県がんセンター研究所疫学田島和雄部長が代理発表）。

先生のご業績を顧みますと、公衆衛生院時代、国立がんセンター時代を通じて、わが国のがんの疫学と予防の先駆者となられ、かつリーダーとして大いに活躍されました。特に、昭和40年に国立がんセンター研究所の疫学部長に就任されると同時に、全国の6府県29保健所管内の地域住民約27万人を対象にして「計画調査」を開始されました。この調査は当時としては世界的にもスケールの大きい画期的な研究であり、先生はこの研究を文字どおりライフワークとされました。この研究から喫煙とがんの関係をはじめ、次々と新しい事実を見つけて学会や研究会で報告されてきました。中でも特筆すべきは1981年に世界に先駆けて受動喫煙により肺がんにかかる可能性があることを British Medical Journal に報告されたことでした。これは世界的に反響を呼び、その後世界各地で多くの研究が行われてきました。

先生は研究成果を学会や論文に発表するだけでな

く、講演や単行本を通じて、がんの予防や喫煙の害について一般の人々を啓蒙されました。先生の表現力は実に豊で、例えば、「たばこ病」という今では一般化した言葉を一早く使って、喫煙によりいろいろな健康への害がみられることを説かれたり、「父さん禁煙、母さん料理、これがわが家のがん予防」というような標語をいくつも作られました。

先生は国立公衆衛生院疫学部に勤務されている間にジョンズホプキンス大学やニューヨークのスローンケッタリングがん研究所に留学され、その後も国際的に大活躍されました。昭和38年から39年にかけてWHOのスタッフとしてインドで口腔がんの疫学と予防に関する研究に従事されたほか、UICCでは長年にわたり疫学プログラムの委員長を勤められました。また、アジア太平洋がん学会では創設期から今日まで22年にわたり、セクリタリージェネラルの要職につかれ、アジア地域のがん研究者をリードしてこられました。

このような国内及び国際的ながんの疫学と予防に関する優れた研究と啓蒙活動に対して、平成元年には厚生大臣から栄えある保健文化賞を受賞された他、WHO賞2回、アメリカがん協会賞、UICC功労賞、イタリアのラマチニ賞、タバコと健康世界会議賞、日本対がん協会賞など、内外の種々の団体から受賞されました。また、お亡くなりになる直前にはアジア太平洋がん学会からも長年の功績に対して表彰を受けられました。先生はまさに5冠王はおろか、誰も真似ができない8冠王になりました。

さて、国内でもわれわれ数少ないがんの疫学者を時には厳しく、時には暖かくご指導ご支援いただきました。昭和56年に日本がん疫学研究会が設立されると同時に同研究会の初代の代表幹事に就任され、全国のがんの疫学者をリードされました。しかし、満60歳になられるや、日本がん疫学研究会の活性化を考えて勇退されました。このうるわしい伝統は現在まで続いており、がん疫学研究会の若返りと活性化に貢献しています。

先生は昭和60年に国立がんセンターを定年退職され、同年に「予防がん学研究所」を設立され、後に「予防老化学研究所」も併設されました。その後もがんの予防や老化防止の研究を精力的に続けられ、がんの予防および喫煙防止に関する啓蒙活動にも全力を傾注されました。先生は志し半ばにして倒れられましたが、これはまさに名誉の戦死といえましょう。先生の志しは残されたわれわれがいささかでも引き継がなければいけないと心に誓っています。どうか今後とも天国からわれわれをお導き下さいませようをお願いいたします。平山先生、本当にご苦労さまでした。安らかにお休み下さい。（平成7年10月30日）

平山 雄先生の急逝をいたむ 青木國雄（愛知県健康づくり振興事業団）

本年10月上旬、ドイツの Potsdam/Berlin の疫学の会議に出発前、平山先生の秘書から電話があった。来る10月17-20日、Singapore の第12回アジア・太平洋がん学会（APFOCC）の理事会へ先生の代理として出席してほしいとの事であった。先生が急に倒れられて病院へ入院されたとのことで驚いたわけである。

先生は APFOCC の第一回会議の後、太田邦夫先生（当時のUICC理事）のご依頼で APFOCC の Secretary General として面倒をみてこられ、本年で22年目となる。アジア各国のがん研究や対がん対策も充実してきたので、この辺りで理事会組織の改正をと考えられていた。それについて事前に相談があった。それは、日本の Council も交代してアジア各国に交代で役員をやらせ、21世紀に備えたいからとのことであった。私は賛意を表した。この件で現APFOCC会長の Sir. Tay (Singapore) と文書の交換をしておられたようである。私は Singapore の学会へは演題を出していなかったが、UICC の役員として補佐を依頼されていたので、今回も出席を予定していた。

面会や会話は可能との事であったので APFOCC 理事会の打ち合わせをした。先生は、残念だが今回は出席を見合わせたい。Sir. Tay へは連絡するので、その通りやって欲しいとの事であり、明年の Penang の会議でこの改正案を決定し、私は引退するつもりである。また後任には、若い人がと名指しされて言っておられた。もっとも、人事はUICC国内委員会で決める事であり、明年まで一年間の期間があるので安心して代理をお引き受けした。Potsdam/Berlin の会議を終えて、Hong-Kong 経由でシンガポールの学会に出席した。第12回APFOCC では、10月18日午前中に理事会があり、私は Secretary General の代理で挨拶し、平山先生のご意向を伝えた。いつもの理事会の主な議題は次期開催地であったが、今回はすでに1996年（マレーシア）、1997年（香港）、1999年（インド）と決定しているので、問題は平山先生の提案にあった。

すでに、Sir. Tay には連絡がいつているので、手際よく話がまとまり、規約改正の委員の他、財務委員の新任も提案され、引き続きの総会で可決された。この会議の議長は平山先生が望まれた News letter を編集している Dr. Nambiar (Singapore) がつとめた。

10月21日（土）夜帰国し、翌週、平山先生秘書に連絡し、万事先生の指示にそって議事が進められたこと、明年まで先生が Secretary General であること、10月26日か27日にこの報告に上京することをお伝えして了承をえた。

ところが、26日、私の名古屋でのある学会の特別講演（この後に上京を予定していた）の直前、急に容態がおかしくなられたので、上京を一時延期して欲しいとの電話がはいった。夜、帰宅すると訃報が待っていた。一瞬言葉を失った。私の手元には夜半 Sir. Tay から平山先生の病気見舞いの Fax が届いていた。

平山先生は、疫学研究に忠実な人であった。朝から夜までがんの疫学と予防のことばかり考えておられた。26万人の大規模コホート集団の研究成果をいろいろ検討され、確信をもって成果とその影響を世に訴えられた、タバコ問題はその中心であり、1970年代から国内で機会をとらえてはタバコの害を強烈に主張された。世界的にも非常に多くの科学的根拠があったのも背景にあり、日本での対策の遅れも苦しめておられたからである。

しかし、先達者は十字架の苦しみを味あわなければならなかった。多くの友人や政府関係者ともしばしば論争があったと承っている。禁煙でがんが予防できるのは重要であり、初心を貫かれ、禁煙キャンペーンを続けられた。最近では世界各国のボランティアと一緒に世界的運動を指導されていた。Passive smoking は先生が世界のタバコ運動に投じた巨大な灯であった。

先生は定年後も研究活動を続けられ、PR活動のために依頼があれば寸暇をさいて、日本全国のみならず世界各国をかけ廻られた。下部組織を持たない第二の人生としては、かなりのご負担であったと思う。頑健な先生であったが、その心配が現実となった。短期間、急性の経過で死に至ったことは、心身共に過労の大きかったことを示している。日頃の先生を知る者には壮烈な戦死ともいう言葉もささやかれた。もう五年仕事を続けたいと言われた言葉が脳裡にきざまれている。

いろいろ批判する人もいるが、先生の業績は国際的に輝いており、また、先生の予防医学実践の姿勢は理論倒れになり易い私共に大きな教訓として残るでありましょう。先生安らかにお休み下さい。

平山先生を偲んで 廣畑富雄（中村学園大学）

平山先生は、もし親しみをこめて平山さんと言わせてもらえれば、平山さんは卒然として去って行かれた。平山さんがもうおられないのだ、という事が、いまだに納得し難いのが現実である。平山さんが肩に愛用のショルダーバッグをかけ、ニコニコと今にも現れるのではないかと感じられる。先生のお仕事、業績については、皆さん知っていらっしゃると思う。約27万人の大規模コホート研究は、余りに有名だからである。この研究は長く日本の、いや世界の疫学研究の歴史に残ることであろう。本稿では私の目から見た、私の肌で感じた平山さんの事を記し、心からご追悼申し上げたいと思う。

平山さんが1-2年印度に行き、調査研究をされた事がある。平山さんはご承知の如く、この上なく active な方である。その時の平山さんのポストに当たる Dr. Tuyns はジュネーブの WHO の本部にいた。彼の言によると、我々はジュネーブでただ座っていたが、タケシはブルドーザーのように働いた、と評していた。皆さんも何か合点するところがあるのではなから

うか。平山さんのバイタリティは留まるところを知らず、である。平山さんが唯一私に疲れをみせたのは、昔ハワイの我が家に、東京からホノルルに着いたばかりの平山さんを迎えたパーティーで、夜のフライトの疲れでウツラウツラしだし、この平山さんでもと妙に感心したことがある。

平山さんは柔道をやった。一高（旧制の第一高等学校）時代に柔道部で鍛錬されたようである。残念ながら柔道の話をついた記憶はあまりない。今となってはもっと伺っておけば良かったと思われる。学園紛争の頃である。日本公衆衛生学会が開かれ、Dr. Joseph Fraumeni が特別講演をすることになった。Joe は今なお NCI で大活躍しているのはご承知の通りである。Joe の講演の最中に、ゲバ学生が壇上に駆け上がり、学会を粉砕しようとした。その時 Joe の話によると一歩逃げ出した人もいたが、タケシだけは Joe の背中から覆い被さるように両手を広げて彼を守ってくれたという。当時の事情を考えるとなかなかできる事ではない。俠気のある先生であった。

日本疫学会は疫学の底辺を広げるべく、セミナーを開催する事になった。確かその第1回のセミナー受講生の中になんと平山大先生がおられた。一番前に座り、熱心に受講し、質問もしたという話であった。講師の先生はご苦労様でした。しかし平山さんの勉学への情熱、疫学、がんの疫学にかけるこの道一筋という情熱は大変なものがあり、とても凡人の及ぶところではなかった。

平山さんは昔 Dr. Wynder の所でがんの疫学の勉強をした。人によると Wynder と平山さんには共通点があるという。平山さんは今まさに卒然として去って行かれたわけだが、妙に Wynder の言った言葉が思い出される。昨年 of anti-oxidants の国際会議で彼が言った言葉、We all want to die young ... そこでポーズをおき、いぶかしがる人々に ... as late as possible. と。平山先生は本当に年齢とは関係なく、身も心も若くして去って行かれた。その点は本当に幸せであったが、ただもう少し天が、せめてもう5年あるいは10年でも、時を与えて下さっていたらと悔やまれるのみである。 合掌

平山先生の思い出

久道 茂（東北大学医学部公衆衛生学教室）

ある詩人がいいました、「人間の死は、それが長い命であれ短い命であれ、その人なりに完結しているものだ」と。本当にそうでしょうか。平山先生の今回の全くの急逝に接してみると、この詩人の言葉はむなしく聞こえるだけです。とてもとても完結などとはいえるはずがありません。しかし、一方で、われわれがそのように感じる死に方を先生がしたんだとしたらどうでしょうか。われわれは、もっともっと深く先生の死を考える必要がありはしまいか。つまり、平山先生

は、今回の突然の死をもって確かに「完結」したのだと思いますが、何か余韻を残しているように感じるのは。「俺はまだまだする事があったんだが、若い連中にも残してやらねばなあ」、「それに気が付いてくれればいいが」と、いっているような気がするのです。がんの予防に、これほどまで命を賭けて戦ってきた人はいるでしょうか。日本の疫学、特にがんの疫学の将来を、これ程までに心配していた先生はいるでしょうか。しかも、暖かいまなざしをして。

先生との思い出はたくさんあります。何度か一緒に国際癌会議もありますが、私が家内と一緒に恩師の山形教授と参加したスリランカのアジア太平洋癌会議に出席した時です。帰りの飛行機で、次の開催を仙台でしてくれと頼まれた時は、山形先生も私もびっくりしたものでしたが、時の流れというか勢いというか、私が事務総長なる役目をして仙台で開催する事になったのでした。その時にもいろいろな事を教わりました。

かつて私が、教室の当時の助教授、現岐阜大学教授の清水先生と共に逆境に立たされていたことがありました。この時ほど、平山先生の慰めと励ましの温かい言葉が嬉しかったことはなかったものでした。そのような立場にならなければわからないものでしょう。ほとんどの方々が、おそらく当たり前の言葉をかけてくれたと思いますが、逆境の時というのは、その当たり前の、ごく普通の言葉が冷たく感じるものだという事がわかりました。そんな中で、平山先生の「そのうち満塁ホームランでも打てばいいよ」という励ましは、当時の二人には本当に心温まる嬉しい言葉でした。私も、もし逆の立場になったら、先生の真似をしようと思っています。平山先生のいう「ホームラン」は打てなかったかもしれませんが、何とかヒットを打つように頑張ってきました。先生、本当にありがとうございました。

昨年のインドでの国際癌会議の時、大勢の人々で混雑するタージ・マハールの駅でバッタリお会いしましたが、例のカバンを肩に架け、ひょうひょうとして現れたいつもの先生が懐かしく思い出されます。スケッチブックには、いつものごとく細かく丹念に描写した絵が、われわれにほほえんでいました。もうそのような場面には、巡り合えなくなったわけです。何とも寂しいかぎりです。先生どうか安らかにお休み下さい。

平山 雄先生の突然のご逝去を悼む

大島 明（大阪がん予防検診センター調査部）

つい先日（6月）に、広島での日本がん疫学研究会でお元気なお姿を拝見していたので、10月26日の突然の訃報には呆然となりました。平山先生は国立がんセンター疫学部長に引きつづき、予防がん学研究所長として今日までずっと現役でわが国のがんの疫学研究をリードしてこられました。全国約26万人を1966年から

長期間にわたって追跡した先生の「計画研究」はまるで打出の小槌のようで、次々と新しい仮説の提唱やその検証にあたられました。このような仕掛けをつくられた先生の慧眼と膨大なデータを活用される先生の着想の素晴らしさは、私たち後輩にとって敬服おくあたわざるものでした。また、私自身の主要な関心は、胃がん検診の評価、肝がんの疫学研究、日韓がん比較疫学、禁煙指導そして喫煙対策へと移ってきましたが、いずれの分野でも平山先生はすでに優れたお仕事をされており、実に的確なサジェスションをしていただきました。

特に先生に見習うべき点は、研究の成果の社会への還元にも大いに努力されたことです。先生は、わが国の喫煙対策の立ち遅れに悲憤慷慨され、未だタバコに甘い「世間」に対して独り憤然と立ち向かわれました。先生のご努力の甲斐あってようやく今年の3月「たばこ行動計画検討会報告書」がとりまとめられ、わが国でも国レベルで本格的な対策の第一歩を踏み出すことになりました。まさにこれからという時に平山先生という偉大な指導者を失ってしまい痛恨の極みです。先生のご遺志を継ぎ「タバコは予防しうる最大のがんの原因」との認識のもとに今後とも喫煙対策の推進に努力する所存です。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

がん疫学の偉大な戦士逝く

田島和雄（愛知県がんセンター疫学部）

乙亥の年、私には日本のがん疫学の受難の年として忘れることができなくなってしまった。先日10月30日は日本のがん疫学研究の英雄「平山雄先生」の告別式に参列した。すでに、今年の1月17日にはがん疫学研究の同志「日山興彦君」を阪神大震災で失っている。口には表現できない寂しさと哀しさを感じながら何ともやりきれない気持ちである。

私のがん疫学を学ぶため富永先生の門をたたいた時、平山先生は厚生省がん研究助成金疫学研究班の班長を務めておられた。すでに日本を代表するベテランの国際的がん疫学者で遠い存在の人であった。その

後、平山先生には学会や研究会などで事あるごとに厳しいお言葉を頂いた。それ以来、17年もの歳月が流れていたのである。先月、京都市で開催された第54回日本癌学会総会の直前、富永先生から平山先生の入院のことをお聞きして驚いた。さらに、平山先生の演題「喫煙開始年齢はヒト発がんの最重要因子：大規模コホート研究から」を私が代わりに報告するべくお達しがあった。私が班長を務めている厚生省がん研究助成金研究班の班長協力者として平山先生が研究されている内容である。その務めは班長としての責任であろう。さっそく、予防がん学研究所から平山先生のスライドが送られてきた。当日は平山先生の気持ちになったつもりで未成年の喫煙開始が肺がんの危険度を如何に高めるかを力説したつもりだったが、残念ながら御本家ほど迫力はなかった。新聞記者への対応も含めて何とか重責を果たしたものの寂しい気持ちであった。そして、3週間後の10月26日には御逝去の報を受けた。東京での二日間のお通夜と告別式を終えて名古屋に帰り、「がん学会で平山先生の代役を務めさせて頂いた」ことを思い出しながら、平山先生に対して何か因縁めいたものを感じている。

これまで、平山先生とは国内外の学会などで度々お会いしてきたが、話題になるのはいつもがん疫学に関連したことばかりであった。平山先生は寝ても覚めてもがん疫学のことばかり考えておられた。酒の怨念に唸らされることの多い私が平山先生の真摯な研究態度を是非とも学ぶべく自戒の念に駆られている。平山先生の御研究は常に迅速であったが、一般の生活においても会話、記述、食事、歩行、スケッチなど周囲の人達がリズムを合わせるのが難しいくらい早かった。そして、長い間に積み重なってきたハードな御仕事の無理がたたって病に臥せられ、それから逝かれるまでのスピードは人一倍早かった。奥様のお話では、平山先生が意識朦朧となられてからも日本語や英語の講演を続けておられたそうである。それをお聞きして私には「平山先生はがんの疫学戦争のまっただ中で戦死された」と思えてならない。歴代の代表幹事が紹介されているように平山先生の御業績は多大だ。私は生前の平山先生が闘ってこられたがん戦争に対する想いを少しでも理解しながら研鑽すべく合掌している。

(1995年10月晦日)

東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西

東西編集後記

去る10月26日、あまりにも突然に亡くなられた平山雄先生の追悼特集号をお送りします。このがん疫学研究会の初代代表幹事であられた平山先生を偲んで、代々の代表幹事の先生方と次期代表幹事の大島先生に追悼の文をご執筆いただきました。わが国のがん疫学

の先駆者であられた先生、あまりにも速く駆けすぎたのではないですか。私のような若輩にも親しくお声をかけてくださり本当に有難うございました。どうか安らかにお休み下さい。

(東北大学医学部公衆衛生学教室 深尾 彰)

発行

日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市千種区鹿子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111 FAX: 052-763-5233
振込口座 名古屋1-37001

編集責任者

深尾 彰
渡辺能行